

日蓮聖人における『摩訶止観』受容の問題

奥野 本 勇

一 はじめに

日蓮聖人が釈尊の教えのもとに、どのように法華経の行者として末法の世に実践されたのか、ということが私にとっての一つの課題である。ところで、法華経には、「五種法師」が説かれるが、その中「解説」として、「教えを説く」という視点から、聖人の生涯における口頭による教化活動の実際について説明を試みようとするのが、私のアプローチである。そこで、聖人遺文から、それに関する記述として、①「談義」、②「天台大師講」、③「摩訶止観の講説」の文を抽出・整理することで確認したい。ところで、聖人の教化活動において、天台大師の命日に大師講を開かれることから、聖人はいかに天台大師の思想面を受容されたのか、という問題が起る。そこで、本稿では、聖人における『摩訶止観』の受容について、聖人遺文から、『摩訶止観』の引用文を抽出・整理することで確認し、ついで、聖人の『摩訶止観』の評価と、「一念三千」の受容について、それに関する記述、A「『摩訶止観』と一念三千の確立」、B「『摩訶止観』巻第五」、C「末代における信行」、D「三障四魔の興起」の文から検討したい。

二 日蓮聖人における口頭による教化活動

日蓮聖人遺文に、聖人における口頭による教化活動に関する

記述を抽出し整理すると、十四遺文十六箇所確認できる。この中、①は八遺文九箇所、②は四遺文四箇所、③三遺文三箇所である。それらを確認すると、聖人は、弟子や信徒との間において、「談義」「大師講」「摩訶止観の講説」により、人々を教導されていることが理解できる。

三 日蓮聖人における『摩訶止観』の受容について

日蓮聖人遺文にみる『摩訶止観』引用について、日蓮聖人遺文中における『摩訶止観』の引用文を管見の限り抽出・整理すると、その引用文が四十三箇所確認できる。その引用文を、『摩訶止観』の十巻別にみると、巻の一は十一箇所、二は四箇所、五は十五箇所、六は四箇所、七は三箇所、八は五箇所、十は一箇所引用が確認できる。さらに、引用文に注目すると、巻第五の正修止観章における観不思議境の一節「夫一心十法界具」の文は、六遺文に及ぶことがわかる。このことを踏まえて、つぎに、遺文から、聖人の『摩訶止観』の評価と、「一念三千」の受容について、それに関する記述、A、B、C、Dの文から検討すると以下のことが理解できる。聖人は、『摩訶止観』が、「説己心中所行法門」の究極の境地であり、一念三千を確立されたとして高く評価し讃えられること。また、巻第五、正修止観章の一節「夫一心具十法界乃至不思議境」の引用により『観心本尊抄』の冒頭は始まり、末代における聖人独自の観心論が明示される。すなわち、一念三千の観法は、末代においては、釈尊の大慈悲により、題目を受持することで得られるとして受容・展開されること。さらに、この一念三千の信行者に対し、『摩訶止観』の三障四魔興起の文をもって、信行

第6部会

の心得を示されること、などである。

四 おわりに

以上、日蓮聖人における『摩訶止観』の受容の問題について少しく考察した。このことから聖人は、一念三千の思想が明かされる『摩訶止観』を高く評価し、その思想を受容されていることが理解できる。また、そのような思想を明かされた天台大師への讃仰と、学恩に対する報恩の念のもと、天台大師講が修されていることが推察できる。そして聖人は、この大師講において、聖人の内包される独自の法門を教示することで、人々を法華経の信仰へと導かれたと受けとめられるのである。

日蓮と預言者類型

——佐渡流罪体験の意味するもの——

笠井 正弘

昨年度の学会では、小松原法難を中心に日蓮の宗教性形成の背景となった鎌倉幕府の内部構造上の特徴を描いた。そこには鎌倉幕府執権を中心に、侍所へと権力集中をはかる得宗被官層による嫡子一括相続体制と、問注所を中心とした伝統的御家人層による諸子分割相続体制の厳しい対立が存在した。日蓮の宗教性は後者の利害に強い親和性を示しており、彼らの危機意識を鋭く反映していた。

今回の報告では、蒙古襲来という国家的危機状況下で生じた

佐渡流罪事件を通して、この体験によって確立した日蓮の宗教性を考察してみたい。日蓮の宗教性を理解するときに、彼が当時莊園領民に広く信じられていた伝統的な天台系密教の正統な後継者であるという自意識、と、正しき信仰者がなぜ苦難に遭遇するのかという弁神論的な矛盾とを、如何に克服したかが問われることになる。彼の死後の日蓮教団の展開過程では、彼の密教的達人としてのイメージが強化され、「苦難の弁神論」の確立者としての面が希薄化してしまった。それが日蓮の宗教性の一面を見えにくくしている。

「苦難の弁神論」の側面を、「使命的預言者」として把握し、その宗教的価値を発見したのは、明治以降現れたプロテスタント系キリスト者たちであった。このことは日蓮を客観的に研究することの難しさを示している。実証主義的なアプローチが、客観的研究の確かな方法である、と思われがちであるが、科学的客観性に関して、根本的に問い直す必要がある。その意味で、ゲオルク・ジンメルが「社会学の根本問題」で投げかけた実証主義的方法への批判は大きな示唆を与えてくれよう。彼の指摘どおり、実証主義は、対象それ自体が研究スタイルを規定するという、哲学的貧困の上に研究が行われている。彼は、研究者の主体的関心と対象との距離こそが研究を可能にしている、という。

内村鑑三や矢内原忠雄といった聖書主義的キリスト者たちは、彼らの主体的関心と日蓮への独自の距離から、日蓮に「預言者」を発見したのであった。それは彼らのキリスト教理解と密接な関連を持つている。以上のような問題意識のもとに、本